

2019年(平成31年)

2月7日

木曜日

夕刊

神戸新聞

神戸新聞社 〒650-8571 神戸市中央区東川崎町1-5-7

<https://www.kobe-np.co.jp>

購読のお申し込み 0120・

昨年、「100才ごはん、3才ごはん」という映像人類学の実験的作品(インスタレーション)を製作し、総合地球環境学研究所のエキシビジョンホールで展示した。食と記憶をめぐる試みで、6面のマルチスクリーンに100才の翁と3才の少女の食の風景が映し出されるといふものだ。

沖縄やんばるに住む深福さんは100才のいまも、元気にシークワサー農園の世話をし、数斗の収穫を家族とこなす。それを支えるのは、好き嫌いのない毎日の食。子どもころに食べたサツマイモの甘い味が忘れられない。

京都に住むたまちゃん3才。トマトとキュウリが好き。今日のお昼ご飯は、お母さんが作ってくれたお肉とごごろ野菜入りカレー風味おじやと夏野菜のサラダ。約20分間、集中力をとぎれさせることなく、楽しく完食する。

食の風景は、家族の風景でもある。深福さんの毎日の食を語る娘さんは、深福さんの豚肉の好み(ブ

随想

100才ごはん、3才ごはん

寺田 匡宏

ロック肉が好き!)を生き生きと語り、たまちゃんのお母さんとおばあちゃんは、それぞれがその前の世代から受け継いできた食の在り方と味について語りあう。

100才の深福さんの食の記憶が鮮やかなのは驚きである。子どもころの食の記憶は、約100年を経てもあせない。一方、たまちゃんのお母さんは、おばあちゃんの筑前煮を再現しようとしても、どうしてもできず、おばあちゃんはそのお母さんの海老辛煮の味を再現しようとしても、どうしてもできないという。味、あるいは味付けがどれほど個人的なものであるかを示す。

記憶は、世代を超えるものである。けれど同時に、個人的なものでもある。社会的存在でもあり、個的存在でもあるわれわれは、この二つの間を揺れ動きながら生きている。食の風景はそんなことを改めて思い起こさせてくれる。

(てらだ・まさひろ)総合地球環境学研究所客員准教授)